

1. ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの時代に、主からエレミヤにあったみことばは、こうである。
2. 「レカブ人の家に行って、彼らに語り、彼らを主の宮の一室に連れて来て、彼らに酒を飲ませよ。」
3. そこで私は、ハバツィヌヤの子エレミヤの子であるヤアザヌヤと、その兄弟と、そのすべての息子と、レカブ人の全家を率い、
4. 彼らを主の宮のイグダルヤの子、神の人ハナンの子らの部屋に連れて来た。  
それは、首長たちの部屋の隣にあり、入口を守る者シャルムの子マアセヤの部屋の上にあった。
5. 私は、レカブ人の家の子たちの前に、ぶどう酒を満たしたつぼと杯とを出して、彼らに「酒を飲みなさい。」と言った。
6. すると彼らは言った。  
「私たちはぶどう酒を飲みません。  
それは、私たちの先祖レカブの子ヨナダブが私たちに命じて、  
『あなたがたも、あなたがたの子らも、永久にぶどう酒を飲んではならない。  
あなたがたは家を建てたり、種を蒔いたり、ぶどう畑を作ったり、また所有したりしてはならない。  
あなたがたが寄留している地の面に未長く生きるために、一生、天幕に住め。』」と言ったからです。
7. それで、私たちは、私たちの先祖レカブの子ヨナダブが私たちに命じたすべての命令に聞き従い、  
私たちも、妻も、息子、娘たちも、一生、ぶどう酒を飲まず、(9)住む家も建てず、ぶどう畑も、畑も、種も持ちません。
8. 私たちは天幕に住み、すべて先祖ヨナダブが私たちに命じたとおりに、聞いて行なってきました。
9. しかし、バビロンの王ネブカデレザルがこの国に攻め上ったとき、  
私たちは『さあ、カルデヤの軍勢とアラムの軍勢を避けてエルサレムに行こう。』と言って、エルサレムに住んだのです。」
10. そこで、エレミヤに次のような主のことばがあった。
11. 「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。  
行って、ユダの人とエルサレムの住民に言え。  
『あなたがたはわたしのことばを聞いて懲らしめを受けようとしぬのか。 主の御告げ。  
レカブの子ヨナダブが、酒を飲むなと子らに命じた命令は守られた。  
彼らは先祖の命令に聞き従ったので、今日まで飲まなかった。  
ところが、わたしがあなたがたにたびたび語っても、あなたがたはわたしに聞かなかった。  
わたしはあなたがたに、わたしのしもべであるすべての預言者たちを早くからたびたび送って、  
さあ、おのおの悪の道から立ち返り、行ないを改めよ。ほかの神々を慕ってそれに仕えてはならない。  
わたしがあなたがたと先祖たちに与えた土地に住めと言ったのに、あなたがたは耳を傾けず、わたしに聞かなかった。』
12. レカブの子ヨナダブの子たちは、先祖が命じた命令を守ってきたのに、この民はわたしに聞かなかった。」
13. それゆえ、イスラエルの神、万軍の神、主は、こう仰せられる。  
『見よ。わたしはユダと、エルサレムの全住民に、わたしが彼らについて語ったすべてのわざわいを下す。  
わたしが彼らに語ったのに、彼らが聞かず、わたしが彼らに呼びかけたのに、彼らが答えなかったからだ。』」
14. エレミヤはレカブ人の家の者に言った。  
「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。  
『あなたがたは、先祖ヨナダブの命令に聞き従い、  
そのすべての命令を守り、すべて彼があなたがたに命じた通りに行なった。』
15. それゆえ、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。  
『レカブの子、ヨナダブには、いつも、わたしの前に立つ人が絶えることはない。』」

13. 「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。

行って、ユダの人とエルサレムの住民に言え。

『あなたがたはわたしのことばを聞いて懲らしめを受けようとししないのか。 主の御告げ。

~l i'Wry>yb'Al.WhdWhy>vyal. Tr'maw%l h' l ar'fjlyh' a/ tAabc. hwhy>rma'-hKo  
' hwhy>~an>yrbD>l a, [nɔlirsWh Wqti aAh]

rsWh xqj' Qal.Impf. take, receive

訓練、懲戒 鍛えること 懲らしめ、罰  
discipline, chastening, correction

## 説教

エレミヤの時代はユダ王国の情勢が最も困難な時代であったと言えます。

ユダ王国の背信により神さまのさばきが臨み、

ユダの国々はバビロンによって征服され、

遂には最後の首都エルサレムまでもがバビロンによって完全に滅ぼされて

国家がこの地上から完全消滅してしまうという亡国の憂き目を味わうこととなるのです。

そのような戦時中の動乱の中、預言者エレミヤは

「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、

あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」(1:5)と召命を受けます。

「わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、

わたしがあなたに命じるすべてのことを語れ。

彼らの顔を恐れるな。

わたしはあなたと共にいて、あなたを救い出すからだ。」(1:7-8)

こう命じられて、あらゆる迫害を耐えつつ、エルサレムの人々に神のことばを妥協なく宣べ伝えます。

35章の話はそのような時代のことです。

ユダ王国の首都エルサレムがバビロン軍の攻撃によって陥落するおよそ12年前、

バビロン侵攻により居場所を失いエルサレムに避難していた遊牧民族レカブ人に、

「彼らに酒を飲ませよ。」との命令が神さまからエレミヤに下ります(35:2)。

言われた通りエレミヤがぶどう酒を差し出して「酒を飲みなさい。」と勧めるや、

彼らは自分たちの先祖ヨナダブから命じられている通り、酒を飲まないといこれを固く断ります。

6. すると彼らは言った。

「私たちはぶどう酒を飲みません。

それは、私たちの先祖レカブの子ヨナダブが私たちに命じて、

『あなたがたも、あなたがたの子らも、永久にぶどう酒を飲んではならない。

7. あなたがたは家を建てたり、種を蒔いたり、ぶどう畑を作ったり、また所有したりしてはならない。

あなたがたが寄留している地の面に未長く生きるために、一生、天幕に住め。』と言ったからです。

8. それで、私たちは、私たちの先祖レカブの子ヨナダブが私たちに命じたすべての命令に聞き従い、

私たちも、妻も、息子、娘たちも、一生、ぶどう酒を飲まず、(9)住む家も建てず、ぶどう畑も、畑も、種も持ちません。

10. 私たちは天幕に住み、すべて先祖ヨナダブが私たちに命じたとおりに、聞いて行なってきました。

11. しかし、バビロンの王ネブカデレザルがこの国に攻め上ったとき、

私たちは『さあ、カルデヤの軍勢とアラムの軍勢を避けてエルサレムに行こう。』と言って、エルサレムに住んだのです。』

このレカブ人というのは、ケ二人の一氏族で、先祖とたどるとモーセの義兄弟ホバブの流れを汲む民族です。もともとはカナンの先住民でしたが「モーセの義兄弟」の流れを汲むということでイスラエルとは言わば親戚関係にもありました。それで、聖書には度々登場します。

特にここで言われている「ヨナダブ」は熱心な信仰を持ち、エフーのパアル礼拝根絶政策に協力しました（列 10：15 27）。そして、その信仰熱心だったヨナダブが、今日の箇所を見ると、自分の子孫たちに一つの誓いを守り通すよう命じていたことがわかります。それは、ぶどう酒を飲まないことと、種を蒔いたりぶどう畑を作ったり所有したりしないこと、家を建てずに、一生天幕生活を送る、ということでありました。そして、それ以来、レカブ人はその先祖ヨナダブに命じられた通りに行ってきたと言うのでした。

これを受けて、神さまは、  
ユダヤ人ではないレカブ人でさえ  
自分たちの先祖の言い伝えをずうっと守り続けているというのに、  
ご自分の民であるユダの住民は  
「わたしに聞かなかった」、  
「すべての預言者たちを早くからたびたび送って、  
さあ、おのおの悪の道から立ち返り、行ないを改めよ。  
ほかの神々を慕ってそれに仕えてはならない。  
わたしがあなたがたと先祖たちに与えた土地に住めと言ったのに、あなたがたは耳を傾けず、わたしに聞かなかった。  
レカブの子ヨナダブの子たちは、先祖が命じた命令を守ってきたのに、この民はわたしに聞かなかった。」と言うのでした。  
傍流のレカブ人は先祖の命令を忠実に守って生きているのに、  
本流のユダは主の命令を捨てて生きている、  
これはユダの住民にとって生きた教材であり大きなチャレンジでありました。  
自分たちは世と妥協して罪の中に生きているのに、  
世と隔絶した厳しい荒野の中で、忠実に自分たちの先祖の教えを守って生きている人々がいたのです。  
神さまは、時にそのような異端の流れを通して、死せる正統派に活を入れ給います。  
神さまはご自分の民であるイスラエルとユダの人々をこよなく愛しておられます。  
それで、彼らにみことばを教えるべく、王を立て、祭司を立て、時には預言者まで遣わして、彼らを教育なさいます。  
でも、それでもイスラエルが言うことを聞かない、いくら言っても言うことを聞かない、少しもご自身のみこころを行わない、  
そのような時に、神さまは、異邦人を通してご自分の民に活を入れます。  
本流から脇に逸れていった傍流の流れから本流にチャレンジを与え、本流に「しっかりしろ」と活を入れようとなさるのです。  
「異端だってこれだけ頑張っているんだから、お前たちもしっかりちゃんとやれ！」と檄を飛ばされるのです。

このことは、日本の近代の教会史に於いても実際にあったことです。

第二次大戦中、国家による神社参拝の強制がなされて全国が現人神天皇と侵略戦争一色の時代に、このような国家権力に真っ向から立ち向かい、敢然と、最後まで戦った抵抗者が日本にもいました。その一人が「燈台社」の明石順三です。「燈台社」とは今で言う「ものみの塔」「エホバの証人」のことです。ただし、戦後、明石順三は米国にある本部（「ウォッチタワー」）に失望して逆らったため破門になったので、今日存在している「エホバの証人」や「ものみの塔」とは直接的なつながりはありません。

ですから、今日エホバの証人の人たちが、

いかにも自分たちが戦時中神社参拝強制と戦争に反対して戦ったんだというようなことを言いますが、それは嘘です。

そんなことを信じてはいけません。

「燈台社」と「ものみの塔」は直接的なつながりがないからです。

両者とも「ウォッチタワー」というアメリカの宗教団体を母体としている点では同じですが、直接的なつながりはありません。

いずれにせよ、「燈台社」、「ものみの塔」、この両者とも、言うまでもありませんがキリスト教の異端です。

明石順三は 1889 年滋賀県の外科医の家に生まれます。

プロテスタント教会で洗礼を受け、18 歳で渡米し、

鉄道や農園で働く傍ら独学で勉強しながら、

邦字新聞にたびたび投書して、その才能を認められ「羅府新報」のサンディエゴ支社の記者となります。

そして、「ウォッチタワー」に感化された夫人の影響で自らも「ウォッチタワー」の信仰を受け入れ、

渡米して二十年後「ウォッチタワー」本部の正式な伝道者として帰国し「燈台社」を設立して日本全国に伝道を展開していきます。

明石順三の優れた点は、聖書を神のことばと信じてそれを実践しようとした点です。

例えば、その最も顕著な例は、「殺してはならない」と命じられている聖書のみことばの実践です。

彼はその「殺してはならない」というみことばを最も単純に信じてそれを実践しようとしてしました。

それで、戦争それ自体を批判し、戦争を引き起こす社会の構造を厳しく批判しました。

そして、その文書を一時期は毎月十万部も、しかもその送付先たるや、天皇や宮家をはじめ、首相、大臣、

貴衆両院議長、議員、枢密院、各省の高官、各界人に至るまで、そうかと思えば遠い地方の田舎の庶民にも送ったというのでした。

2・26 事件で暗殺された斉藤実首相も燈台社の影響を受けていました。

明石順三は、当時の日本の帝国主義を次のようにストレートに批判します。

彼は、世界を金で牛耳る財界、資本家を糾弾します。

「工場や製造所などに関する労働状態に見るも、

従業者や職員の労銀は雇い主の手で益々削り取られるばかりか、

雇い主側は容赦もなく解雇手段を執り、

今や、何百万という失業者をして食うに食なき妻子を養い得ざる悲惨に陥れ、

しかも彼ら資本家側は不義の栄華を楽しんでいるのである。

一方、富める者より僅かな労銀を得て

彼らにほとんど生死の権を握られている労働階級の人々の心には、益々悲哀の念が刻み込まれて行く。」

「これら我利我欲の徒は選挙を左右して己が欲する処の人物を自由に政府の要所に置く。

民衆は単に選挙の形式を踏むといえども、結果は常に資本家の意のままとなる。

国民の公僕たるべき政府役人は資本家の命のままに国法を改変して一般国民の複利を無視す。

かかる悪法の下に一般民衆は蹂躪され、強奪さる。

ある市民は怒ってこれを法廷に争うも、正義を行うべき法廷はこれもまた強欲なる資本家の手の下に自由に支配されていた。

貧しき者の法廷に勝つはほとんどの場合絶望である。」

「今日に於いて最も強欲の徒は、  
その強大なる財力と権力、勢力を用いて、社会の報道機関なる新聞雑誌を自由に支配し、  
いわゆる世論なるものを作り上げて自己のために利し、人々をして事実の前に盲目ならしめている。」

「これら少数の資本家は良心なき政治家を舞台に踊らし、  
キリスト教会と呼ばれる一制度と、特に牧師、伝道師などの教職者をしてその伴奏の訳を承らしむ。」

「政治家たちは、各種の平和条約の締結に賛成すと称しつつ、  
各国共に軍備拡張に熱中し、空前未曾有の大戦備を整えているのである。  
この政策に於いて政治家は他の金権者と教権者より強力なる援助とを受けている。」

「一国の民衆は他国の民衆と戦うを欲せず、またこれを煽動もしない。  
戦争の重荷を負うべき肝腎の民衆は決して開戦についての相談には与らない。  
ただ政府当局者のみが、商業の利権拡張やその他のいわゆる理由のために他国に対して開戦を決定するのである。  
当の戦争製造者は自国の安全なる場所にあつて、  
開戦の事情には一切通ぜざる一般民衆のみが急ぎ武装されて戦線に急派され、そこに苦しみ、死ぬることとなっている。  
~この戦争を製造したる当人等は国家に勲功ある者として光荣ある勲章を受け、  
何ら事情を知らざる数百万の人間が無理矢理に死なされるに至っては全くの言語道断、沙汰の限りである。  
況やそこに戦争の結果として無数の老若男女を苦悩せしむる戦争の恐怖の甚大なるに於いてをやである。」

本来はこのようなバカげた戦争をやめさせなければならないはずの

キリスト教会の教職者に対しても、明石は次のように厳しく批判しました。

「イエスキリストは、父なる神エホバの律法なる『汝殺すことなかれ』を教えて真のクリスチャンに対する戒めとされた。  
イエスはさらに教えて、己が兄弟を憎む者は殺人者であると示された。  
が、世界大戦に際して、ほとんど全部の聖職者は民衆の敵愾心を煽動し、互いに殺し合えと奨励した。  
キリスト国の教職者と『群の長たち』は敵味方にほとんど二二分されていたが、  
しかも彼らは敵側の人間を殺害せよと奨励煽動したのである。」

明石順三の三人の息子たちは

偶像崇拜を嫌い「日の丸」に対する敬礼を拒否して運動場の壇の横に立たされ、全校生の前で校長に叱られます。  
順三の教えを受けた村本一生は兵役を拒否して不敬・抗命罪で懲役二年の刑に処されます。

そうして、遂に、順三自身も、

1939年治安維持法違反により燈台社関係者全員と共に逮捕され、  
燈台社は強制解散、順三は懲役十年の判決を受けることとなります。

夫人は懲役三年六ヶ月となったものの肺結核と神経痛により獄死します。

しかし、そんな中でも明石順三は裁判官の取り調べに対して妥協なくこう答えたのです。

(天皇の神聖ということに関して)

「尊厳神聖と云ふようなことは全然認めません。」

「(『天皇陛下の御地位についてはどうかね。』との質問に対し)天皇の御地位などは認めません。」

「私が今迄に申し上げた真理は神のことばです。

絶対に間違いは有りません。

現在私の後についてくる者は四人しか残っていません。...

一億対五人の戦いです。

一億が勝つか五人が言う神のことばが勝つか、其は近い将来に立証される事でありませう。...」

日本本土と植民地全域のキリスト教会が沈黙していたあの時に、  
真理なる神のことばをいのちがけで語っていた異端がいたのです。

神さまは、レカブ人を通してご自分の民イスラエルにチャレンジをお与えになりました。

そして、「燈台社」を通して、同様にチャレンジを与えられるのです。

「異端だってこれだけ頑張っているんだから、お前たちもしっかりちゃんとやれ！」と激を飛ばされるのです。

**『あなたがたはわたしのことばを聞いて懲らしめを受けようとしぬのか。 主の御告げ。**

「懲らしめ」と訳されている言葉は、「訓練、懲らしめ、罰」という意味です。

痛い教訓を「受ける」、「痛い教訓を肝に銘じよ」ということでしょう。

どういう教訓でしょうか？

レカブ人は忠実なのに、ユダヤ人は不忠実だという教訓です。

異端は忠実なのに、お前たちは不忠実じゃないか、という教訓です。

異端が忠実な傍らで、神の民は不忠実だったのです。

異端が神のことばを語っている傍らで、神の民は嘘偽りを語っていたのです。

神の民がいいかげんなことをやっている傍らで、しかし異端は真実を語っていたのです。

それを肝に銘じよ、痛い歴史の教訓に学べ、というわけです。

しかし、この時、エルサレムの住民は、結局この教訓に学ぶことはありませんでした。

そのため、それからおよそ12年後に神のさばきを受けて、エルサレムはバビロン軍により滅ぼされてしまいます。

**『あなたがたはわたしのことばを聞いて懲らしめを受けようとしぬのか。 主の御告げ。 』**

この右傾化甚だしい時代にあって、

ここに集う私たちは、痛い教訓を肝に銘じ、

時が良くても悪くても、

語るべきを語り、なすべきをなして、

この悪い時代に神の栄光をあらわして生きていかれるよう、主の御名により祈ります。